

緑のまきば

1967, No.1
(No. 1)

小井井 緑町 教会
小井井 市 緑町 四丁目 16-33
(電話) 四二二一・三七一・七五八二
編集 山本圭一

教 説
夜はふけ、日は近づいている
(ローマ書 13章 11-14)

山 本 圭 一

この地に伝道が開始されて今年のクリスマスで満二年になる。『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さった。パウロは言っているが(コリント五四ノ一)、この光なくしては、いくつかの山坂を歩き通すことは不可能であつたらう。光が照り輝くところで私たちの暗が暴露せられる。しかし、そこに神の救いの秘義と慰めが用意されていたとは何と驚くべきことであろうか。

もともユダヤ教徒であつたパウロにあって主イエスは暗のシンボル以外何者でもなかつた。ところが眞実は意外にも、この暗であると思つていた主イエスが、逆に光であつた。この光の前に出た時、実はパウロ自身、暗であることを思い知らされたのである。「時」とは、モファットの誤したように私にとつて「危機の時」である。このまま放置できないこと、見逃せないことが私の身に起つてきたのである。眞理についての事柄が、自分自身に別して語られた時、危機が私たちの存在

にまつわる根本的な、極めてリアルなことになるのである。

II

「特に、この事を励まねばならない」パウロは危機にのぞめた者の方向を意志する。「時を知っている」のことは、に就いて「ホーティ」という目的を表わすことは原文にあるのは、「時を知っている」のだから、特に「時を誤している」ことばのニュアンスにも生きている。その目標こそ「眠りからさめるべき時が、すでにきている」という強烈な認識である。このような理解は、当時、ローマの権勢の中で生活をいとなんでいたローマにあるキリスト者には、少なからずショックをなすものであつたと思われ、事実、宴祭と泥酔、淫乱と好色、争ひとねたみといふことが彼らのまわりにも、或いは彼らの中にもあつたからである。日常生活の中に空しく転落していた事態が問われ始めたのである。肉の欲を満たすことに心を向けている者にとつて、この「時」この危機に出会うとは何と皮肉なできごとであろうか。

III

不安と絶望の夜がながく私たちをも

閉じていた、そしてそこならぬがめうとする努力があつたにも関わらず「何も今日のうちに決着しなくても明日があるではないか」とひそかに自らを慰める日々が続いた。明日が、明日が、そうするうちに事態はただ放置されるだけで、空しく、時は流れた。夜はふけ、暗が私たちを蔽い、光は失せていった。雨戸を固く閉じて、この夜のうちに私たちは眠り続けた。

しかし、根本的な事態は、私たちにあって明らかに動いていたのである。「日は近づいている」

すでに、日は東天に輝きを増し、雲はあかね色に色づき始めた。刻々と接近し深臨するもの。これぞか、て来り給ひ、今われらのうちに来たり給う主イエスではないか。「日は近づいている」ことによつて暗は光を見た。キリストの来臨によつて私たちはキリストを見ることを許されていく。この福音のゆえに「主イエス、キリストを看なさい」という命令がようこばしいこととなり、クリスマスは慰めになる。「われわれの研究するべきことが遠い過去のことであるときですら、それが歴史的に認識されているという条件は、そのできごとがわれわれの精神のうちに鼓動していなければならぬといふことである」。歴史家コリンタウツの指摘は、パウロの命令についてわれわれを新しい洞察に導く。歴史と世界はその暗を変えなくとも、これらに對するキリスト者の態度はすでに決定的に変えられていたのである。「主よ、われらの古き人を脱がせ、キリストを着て生かしの給え。アーメン」